
ストライクウィッチーズ×メタルギアソリッド

御琴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ストライクウィッチーズ×メタルギアソリッド

【Nコード】

N5158Q

【作者名】

御琴

【あらすじ】

時は現代（大体2015年）、世界の経済姿勢は戦争という大きな犠牲と力で支えられていた。様々な軍事企業が、政府が、戦争という大きな力に支配されていた。

もちろんこのような経済では戦争を生業とする組織も多く、数多の武装組織が自らの利益の為あらゆる手段を使い世界を恐怖に陥れていた。

そんな中、あの伝説の傭兵が伝説の少女たちと手を組み武装組織の中心核である『ネウロイ』の殲滅作戦を始める！！

第一章 「魔女と蛇」 (前書き)

文章能力には期待しないでください。がっかりすると思われれます。心して読んでください。

第一章 「魔女と蛇」

アフリカ南部沿岸上空

「まあそう言うにはまだ早いぞ？」

ノーマッド機内では大人二人がなにやら軍事的な会話を広げていた。一人はオタコンといいシャドーモセスの生き残りで、メタルギアという世界をも危機に陥れる核発射二足歩行戦車の開発者だ。だが、本人は利用されたままで、悪人ではない。

もう一人の名前は、スネーク。彼は単独潜入のエキスパートでたった一人でシャドーモセスを陥落させ、世界を救った伝説の傭兵である。

「スネーク、良い知らせがある」

会話を切り上げ、オタコンが何か言おうとした。

「なんだ？言っておくが悪い知らせは勘弁だぞ？」

「良い知らせだって言ったんだけど・・・？」

オタコンは自分の眼鏡を右手で整えながら言い返した。

「ヨーロッパ付近で501統合戦闘航空団『STRIKE WITCHES』という部隊が結成されたらしいんだ」

「『STRIKE WITCHES』、さぞかし疾風の魔女達といったところか？」

こういふ話題になるとだけスネークは異常に食いついてくる。

「そつだよ」

『STRIKE WITCHES』……
一体どのような部隊なのか、少し気になった。

「じゃあスネーク、早速本題に入るよ？」

突然、オタコンが真面目な顔になって説明をしてきた。
多分、恐らくだが……大体予想できた。
話の順序からしてスネークは何かを悟った。

「ああ」

「今回は、その501統合戦闘航空団『STRIKE WITCHES』のサポートをしてもらいたいんだ。」

予想通りだ、言うと思った。

話を繋げる様にスネークは驚いた表情で、言った。

「なんだって？おい、まさかオタコン……新米の部隊の教官にでもなれと言ってるのか？」

が、オタコンに一枚取られた。

「スネーク？……まずはあっちの指揮官に連絡をとらなければならぬんだけど……。今回は少し、戦場の厳しさを知ってもらうためにサプライズを仕掛けようと思ってるんだ」

やはりそうだ、何を言い出すかと思えば……

オタコンの癖は、まず最初に冗談の中に本題に関することを少し取

り入れる。

冗談だと相手に理解されると本題を持ち込んで、相手の興味を探る。

「ところで、どんなサブライズが良いと思う？ 僕的にはやっぱりカボチャの中にフラッシュパンを入れて少し驚かしちゃおうかなと思ってるんだけど・・・」

「いや、俺はそういうの興味は無い。できれば、冗談の範囲内でやって欲しいものだ」

言う前にオタクコンが、真面目に話を中断して言う。

「スネーク、すまないが問題は深刻なんだ」

良い知らせと saying していたのを覚えていたスネークだったが。

さすがにオタクコンの癖を知っていたスネークは黙って話を聞いた。

「ネウロイというテロリスト部隊がロマーニヤ（ローマ）を占拠してるらしいんだ」

「で、俺にどうしろと？ それはさすがに俺たちが関わるわけには行かないだろう。近くの特務部隊に任せておけば良いじゃないか」

オタクコンは付け足すように言う。

「実はね、そのネウロイというのがちょっと厄介なんだ」

「具体的に話してくれ」

「ああ、このネウロイというテロリストは・・・僕たちと同じで、思想で動く奴らなんだ・・・」

スネークは知っていた。

思想で動くテロリストがどれだけ恐ろしいかを。

だが、思想だけでは意味が無い、もつと他にも事情があるはずだ
た。

そう考えたスネークはオタクコンに質問をした。

「実は…… RAY を持つてる。いや、手に入れてしまったん
だ。オリジナルじゃないけど、量産型の方をね」

「で、彼らの要求は？」

「スネーク！行ってくれるのかい!？」

「ああ……まあ、ロマーニヤには少し思い入れがあつてな……
まあそんなところだ」

スネークは単独潜入に慣れたエキスパートだ、当然同行するパート
ナーなどいない中で活動をしてきた。

つまりだ……

「ただし俺一人だ」

「えっ？」

「共同で作戦はしない。俺は単独潜入の方が性に合うんでな」

「あつはは！分かったよ。501 統合戦闘航空団『STRIKE
WITCHES』にさっそく連絡をするよ。もちろん、遠まわしで
だけど」

ノーマッドは急旋回し、北に向けて飛んだ。

「じゃあ、彼らをサポートする形でお願いできるかい？」

「ああ、そのつもりだ」

ヨーロッパに飛ぶにしてもかなり時間がる。

サニーがいつものように目玉焼きを焼いて来たり。

オタコンがモニターと面合わせしながら文字列と格闘していたり。スネークはもちろん、銃のメンテナンスや体が鈍らないようにトレーニングをしていた。

「ヨーロッパまではまだ時間があるけど、休んでいくかい？」

ようやく文字列と戦いに勝ったのか、クタクタになったオタコンが言う。

「まだ、疲れじゃない」

さすがに老体なのに長時間トレーニングをしている所為か、オタコンが心配したらしい。

スネークの体と見た目の年齢はもう70後半なのだ。

これは心配せざる終えなかった。

しかしスネーク本人はまだ40代後半で、とても見た目と合わない年齢だ。

これでは、鯖を読む強いオッサンにしか見えない。

しかし、事実なのだ。

「いや、それよりその『STRIKE WITCHES』というのについていろいろと知りたいんだが何か情報は無いのか？」

「それは着いてからの、お楽しみだよスネーク」

「なぜ彼らの教官にならなければいけないのかを聞きたいんだが……」

結成されたばかりの部隊だからか？さすがにそれは無いと考えた。結成された部隊ならなおさらで、専属の教官がいるものだ。

「それなら教えて上げられるよ、スネーク」

これは以外だ。できればもう少し具体的な理由を教えてもらいたいところだ。

「なんだ？」

するとオタコンはニヤリと笑いながら意気揚々で言った。

「彼らは、本物の魔女なんだ！すごいよね！」

スネークは驚かなかった。

むしろ機内の二階に居たサニーが驚いたらしく。

鍋か何かを落とすような音が聞こえた。

そうとう動揺していたらしい。

魔女程度で驚いていたら、スネークはここには居ない。

なぜならそれ以上の者とスネークは死闘を繰り広げてきたのだから。

第一章 「魔女と蛇」 (後書き)

感想、文句、コメント、アドバイス。ドシドシお待ちしております。
当小説をお読みいただき誠にありがとうございます。

第二章 「豪快。織細」

「新しい教官？坂本少佐がいるのにな？」

宮藤はこれから来る新人教官に疑問を抱いた。

エーリカはどうでも良いと言ってその場を離れて浴場に行ってしまった訳だが。

リネットとその他全員はその新人の教官について色々噂話をしていった。

一方ミーナと坂本は、司令室でその新人教官について少し、今後の体制を考えていた。

新人教官の連絡は唐突にやってきたもので少し焦っていたものの、軍の上層部からのロマーニヤのテロリスト殲滅命令だと言われると信じざるを得なかったのだ。

「しかし、変な奴だったな……サプライズがどうか言っていたが。私達はウィッチとして真面目にやっていると言っのに、まったく緊張感すら感じられなかったぞ」

連絡の内容がどんなものだったのかはさておき。

ミーナが苦笑いしながら坂本を慰めるように言った。

「まあ、結成されたばかりで隊がまだピリピリしてるんだし、こういうのはたまに良いんじゃないかしら？」

あえて、坂本の前では隊に甘い態度を取るのがミーナの『坂本に対する会話方法だった』。

でないと、常に皆の前では鬼教官として振る舞っている坂本が後々シヨックを受けてしまうからだ。

どういう意味かという。実は、ミーナは坂本に新人教官のことを話していないからだ。いや、正確には話し忘れたというべきなのだが……遅すぎた。今言えば確実に軽いショックを受けて自室に籠りっ放しになるだろうと予想した。

しかし、ミーナは内心こういう坂本も見たいと思っていたらしく。

これもあえて、話さなかった。

坂本が部屋から出て行くと、ミーナは。

「つぶく、ふふふ……しっしし……あ、どうしよう……」

今更後悔した。

最終的には次の日、みんなの目の前でミーナは坂本に告白したわけだが。

予想通り坂本少佐こと坂本美緒は何も言わず、口をポカーと開けてその場で長時間棒立ちして。

夕方には滑走路の一番端っこで飛び降り入水自殺をしようとして、宮藤が横からタックルして間一髪でようやく騒ぎが収まったのだが。今度は自室に籠り、なにかつぶつぶ言っていて。文字通り、坂本が坂本でなくなつた。

宮藤が坂本を心配しに来たらしく、部屋の前に晩御飯の肉じゃがを置いた。

「あーどうしよう……坂本少佐？あの、晩御飯置いておきました、冷めないうちに食べてくださいね。その、元気出してください」

ドア越しから伝わってくる、怨念に恐怖で身震いした宮藤は一目散にドアの前から離れた。

「どうだった？芳佳ちゃん・・・坂本少佐の様子・・・」

「怖かった・・・」

「え？・・・どういうこと？」

「行ってみればわかるよ・・・なんか、ドアから冷気でも出てるんじゃないかってくらい寒い・・・」

一体どれ程のものだったのか考えたくも無いリーネだった。

「いや・・・遠慮しとくよ・・・坂本少佐・・・大丈夫かな？」

「多分・・・大丈夫だよ・・・きつと明日には何事もなかったみたいに・・・出てくるよ・・・はははは・・・」

翌日、坂本少佐は何事も無かったかのように食堂にて宮藤とリーネの作った料理を食べていた。
その姿にみんなが死んだ人間が蘇ったかのような眼で坂本を見ている。

「なんだ？みんなして。まるで、死んだ人間が蘇ったのを見ているようだぞ？」

そこで、ミーナが問う。

「もしかして、昨日の事覚えてなかったりしてない？」

すると、坂本から驚くべきセリフが帰ってきた。

「昨日なにかあったのか・・・？」
「あつたもなにも・・・教官がぶっ」

途端に、後ろに居た宮藤に口を押さえられた。
今、ここでまた言えば同じように惨劇が起きる。宮藤はそれを恐れて、口を押さえた。

「教官がどうした？新しい教官が来るんだろう？なーに、私も1から基礎を学ぶことにするさ」

「覚え・・・てたの・・・」

みんなの冷えた腰が一気に和らいでいく。
すると坂本が宮藤の前に行き、耳のそばでこう言った。

「・・・昨日は、いろいろありがとう。あと、肉じゃが美味かったぞ・・・」

宮藤は思いもよらぬ言葉に、顔を真っ赤にした。

「・・・？芳佳ちゃん、どうしたの？芳佳ちゃん？ねえってば！・・・芳佳ちゃん？」
「・・・あ！ううん、なんでもない。ちょっと考え事してた・・・だけ・・・」
「早く食べないと、冷めちゃうよ？それより、新しい教官が楽しみだね！」

ノーマッド機内

「ツブアックシュン！！・・・」

「スネーク・・・どうしたの。クシャミなんかして？風邪でも引い

たのかい？」

ベッドから立ち上がり、ティッシュを一枚取り出して鼻をかむ。

「いや、ダンボールに噂されたらしい……」

第二章 「豪快。織細」(後書き)

感想、文句、コメント、アドバイス。ドシドシお待ちしております。
当小説をお読みいただき誠にありがとうございます。

第三章 「出会い」(前書き)

これ一応言うけど、リクエスト小説だから！期待しないでマジで。

第三章 「出会い」

ギイイイイイイツッ！！

と、ゴムとコンクリートがお互い摩擦による高音が滑走路上で鳴り響く。

着陸した大型の輸送機はゆっくりと、慎重に、速度を落としていく。中の操縦士は繊細な手つきで操縦輪を下げていくのが想像できるほどの巧みな着陸だった。

灰色の機体は、エンジンを切らずそのまま第一格納庫に向かった。ノーマッドだ。

武装は一切していない、ただの輸送機で恐らく年代物に最新鋭の技術で改造を施したのであろう。

と、格納庫の二階の手すりに寄りかかっていたバルクホルンがまじまじとその灰色の巨体を眺めながら、頭の中での考察を独り言として口に出していた。

「ほお、1962年に配備されたC-130Eじゃないか。主翼の形がかなり独特だな……。それにどこの国かを示すマークがない……。あと、機体の色落ちと傷から見る限りではそれほど着陸していないようだ。一週間に一回の頻度で給油の為に陸に降りてきている程度、といったところか」

両腕を組み、目を細めながら言った。

だがバルクホルンの隣で格納庫の窓拭きを担当していた宮藤芳佳、通称芳佳が雑巾を片手に不思議そうに、子犬を見つめるような目で、

「何が独特なんですか？」

笑顔で、それも凄まじい程の笑顔で、バルクホルンに問いかける。

芳佳の存在に気付いたバルクホルンは、一瞬にして石像のように動かなくなつた。

直後に、芳佳に対し背中を向けた。

「な、ななななななんでもないっ！気にすることではない！ハッハッハッ」

「ホントですか？・・・わっ！？」

芳佳が何かに驚愕した。

それをすぐさま察知したバルクホルンがクルツと、とてつもない速さで180度回転して芳佳に向き直る。

「な、なんだっ！？」

「ど、どうして顔が真っ赤なんですかつ！？バルクホルンさん！？」

「か、顔！？いや、え！？別に赤くなつていない！！なんでもない！！」

「熱ですかっ！？なら、保健所へ行かないと！バルクホルンさん！！」

バルクホルンがあたふたしているのを真下でシャーロットがニヒヒと笑いながら眺めていて、その真上にある鉄骨の上ではフランチェスカ・ルッキーニこと、ルッキーニが大きな欠伸をして昼寝をしていた。

ノーマッド機内

「スネーク、到着だ」

台詞の最後に句点が付くくらいの短い台詞で仮眠をとっていたスネークを呼びかける。

呼びかけたが起きないので傍まで歩いて行き、肩を軽く叩こうとしたが、

「オイルの匂いがする……」

「ああ、着いたよ。501統合戦闘航空団『STRIKE WIT
CHES』の基地だよ。ほら、サニー降りてきて見てみなよ。あれ
が、魔女だよ！」

「でもみんな、若いわ」

それにはハル・エメリツヒ、愛称「オタコン」も正直驚いていた。

「うん？おかしいなあ。聞いた話では、確かに女性のはずなんだけ
ど……軍服を着た女の子しか居ない……」

横でスネークが寝台から起き上がる。

寝台は人が寝ても問題ないというほどの機能しかなく、むしろ座っ
ていたほうがマシと言える位硬く、ノーマットの不眠症生産マシー
ンと言われていた。

「で、その魔女とやらは一体どこに居るんだ？」

腰を抑えながら質問するスネークだったが、その姿は例の猛反発ベ
ッドにやられた老人そのものだった。

「多分此処には居ないんじゃないかなあ？ここには格納庫の整備を
手伝っている子供しか居ないよ」

「それよりオタクコン、俺のタバ……」

「なに？」

言いかけたが、やめた。

「いや、いい。それより、マッサージ器はあるか？」

「ごめん、スネーク。そんなモノはないよ、良ければ作ってあげるよ？まあ素材があればの話だけだね。そろそろ降りよう、もしかしたら保健所が有るかもしれないから貸してもらえるかもしれないよ」

そう言うと直ぐ様オタクコンは身の回りに散らかっていたものを掃除し、片付け、クローゼットからスーツを取り出し、着替えた。

スネークの方も着替えが終わったらしく、ネクタイを結べているかサニーに確認してもらっていた。

一方でサニーは外に居るのが苦手なのでノーマッド機内に居るとオタクコンに主張し、代わりにお土産を買って欲しいと強く希望していた。

もともとサニーには友達というものが居ない、その対価としてネットワークを自由に飛び回ることができる。

ある意味での親友なのだ。

とはいっても、サニーは今回のテロリスト、ネウロイについての情報をより多く掴むためノーマッドに居座るだけなのだ。

それでも、子供であるサニーにとっては嬉しくも、やはり寂しい事だった。

ハッチの開閉スイッチを押すと、金属同士が小擦れ合い、不気味な音を奏でながら大きなハッチがゆっくりと開いていく。

一応油圧式と小型モータを連動させている為、開くときの速度は変えられるが安全のため最低速度にしている。

完全に開き終わった頃には二人は既にノーマッドから降りて、今度

はハッチがゆっくりと閉まっていき、先程の甲高いモーターの音と金属摩擦の音が最悪の音楽(?)を奏でる。

「ようこそ、501統合戦闘航空団」STRIKE WITCHES
S『へ!」

目の前に軍服を着た10代後半の女性二人とその後ろに並ぶ、オタクコンが先ほど見た少女たちが横一列に整列し、敬礼をした。

第三章 「出会い」(後書き)

感想、文句、コメント、アドバイス。ドシドシお待ちしております。
当小説をお読みいただき誠にありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5158q/>

ストライクウィッチーズ×メタルギアソリッド

2011年2月25日16時48分発行